

水名(河川名)「サワ」(沢)「シガ」(氷)小考

——オーストロネシア語は¹2度列島をうるおす——

安部 清哉

キーワード：系統論、河川名、地名、モンsoon・アジア、サワ、タニ、ヌマ
要旨：日本及びモンsoon・アジア地域の河川名には、歴史的に言語・地域文化との密接な関係が認められる。水名「サワ」と「シガ」類はともにオーストロネシア語との同源語である。また、これらは伝播ないし定着した時期が前後に異なっていた可能性がある。水名分布と方言分布からは、南方の言語の影響は日本列島の本州には2度以上及んでいる可能性がある。

1 はじめに——「モンsoon・アジア文化圏」の中の同源語「さわ」(沢)

日本語の古い基層として、モンsoon・アジア領域【図1】^{註1}の言語がある可能性を、安部(2001.8、2003.7)、ABE(2003.7)以降指摘してきた。「モンsoon・アジア」(以下MAと略記)は、元来は気候学での名称であるが、アジア史研究でも文化人類学研究でもまだほとんど認知されていない領域である。

この領域は、執筆者・安部が、日本語の河川地形名の分布を取り上げ、国内方言の「方言地理学」的解釈、及び、河川地形名の近隣言語を含めての「言語地理学」的研究から、その背後にMAという気候の影響があることを見出し指摘するに至ったものである。

モンsoon(以下MA)が影響するアジア・太平洋の広い範囲では、河川地形名及び類別詞という言語現象のほか、気候・植物・動物・主食作物・農耕技術・食物保存加工技術(発酵)・道具加工技術(旧石器)等が一定の共通する領域(ないしその周囲とは異なる領域)を形成している(個々の分布は安部(2003.7以降の拙論、および最新の2025.3)参照)。

その共通現象の多さは世界的規模で見ても特異であり、先行する指摘も世界的に見られないので、文化人類学的重要性を込めて「モンsoon・アジア文化圏」と名付けた。また、その大陸側内部にはほぼ共通(近接)した位置に分布境界線(帯)が引けるので、それを動植物境界線「津軽海峡—ブラキストン線」「七島灘—渡瀬線」等に準えて、「Monsoon Asia-ABE-Line」と名付け(安部2001.11、安部2004.7)、分布境界の目安とした。これら「モンsoon・アジア文化圏」「Monsoon Asia-ABE-Line」、さらに「MA中央気候境界線」^{註2}も含め、言わば「地理学(文化地理学)」的研究としての名付けで

もある。

本稿はそのような研究の一環として、「水名」^{注3}ないし「河川名」と呼ばれ、また、時に「水源地形名」「水名体系」とも呼ばれる河川・湖沼・谷地・湿地・谷地・谷地・谷地（以下総称として「河川名」ないし「水名」と略称する）の重層を概観し、特にそのうち「サワ（沢）」について考察していきたいと思う^{注4}。

日本語での「河川名」としては、サワのほか、カワ川河、タニ谷、ナイ、ヌマ沼、ヌタ沼田・埜、イケ池、ヤツ・ヤチ（谷地・谷地＝谷状湿地）、などが該当する。その日本列島での分布は、次章で概観する。なお、現時点での安部の考察では、上記河川名の推定祖語形およびそれらの現時点での分布確認領域（「」内）は以下の通り。

○*nahdi（川）・nai [MA] - *num・*nub・numa（沼・泥）[? 東アジア] - *sugwa・*sapa（川／沢）[AN語] - *yat・yati（湿地）[未詳] - *tan・tani（川／谷川）[KRN. & JPN, アルタイ語か?] - ike（池）[JPN]

2 日本語における河川名の重層——川・沢・谷・沼・池・谷地

この章では、「河川名」である「サワ」「ヤチ、ヤツ、ヤト」「ヌマ」「イケ」「タニ」に関して、まず日本列島における「地名」としての分布を、いま最も信頼できる地名資料として鏡味完二（1958）による【図3～図7、図9・10、図12・13】にて示しておく（本論末尾一括掲載、便宜的に一部分分布範囲を示す補助線を付し改編したものがある）。

- 【図3】サワ（沢、さば）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図4】ヤチ・ヤツ・ヤト（谷地、谷津、谷戸）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図5】ヌマ（沼）／イケ（池）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図6】タニ（谷）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図7】ナイ（川）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図8】関東の「奥東京湾」と縄文時代の考古学的遺跡の南北差（安部（2003）参照）
【図9】「川（小川・沢）：サワ・スガの言語地図」（安部（2004.12）の図に加筆）
【図10-①】スワ（諏訪）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図10-②】シガ（滋賀・志賀）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図10-③】スカ（州処）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図10-④】ソガ・スガ（曾我・須賀）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図10-⑤】スゴウ（須郷、須川、菅生）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図11】方言圏 $\alpha - \beta - \gamma$ の境界線（安部（2024.3））
【図12-①】ヤチ・ヤツ・ヤト（谷地・谷津・谷戸）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図12-②】ヤギ（八木：谷岸か）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図13-①】ヤノ・ヤハラ（谷野・谷原）の地名分布（鏡味完二（1958））
【図13-②】ヤダ（谷田）の地名分布（鏡味完二（1958））

【表1】 河川地形名語彙（古代語を含む意味分類）

形状的意味（地勢的形態、河川、沼沢湿地）	地形＋河川	地形／地形＋水源（湿地・水域）	河川	流れがある？	流れが無い？	？人的活用（水溜・灌漑施設）
語形	タニ	ヤ（ヤチ、ヤト、ヤツ）類	カワ	サワ	ヌマ	イケ
谷状地形、溪谷、峽谷	タニ	ヤ（ヤチ、ヤト、ヤツ）類				
	タニ	ヤ（ヤチ、ヤト、ヤツ）類	タニガワ（カワ）	サワ		
谷川・沢歩き程度の沢川	タニ	?ヤ（ヤチ、ヤト、ヤツ）類				
中規模の河川			カワ	サワ		
小川			オガワ	サワ		
湿地、沼沢地				サワ	ヌマ	
					ヌマ	
自然の水溜め、溜池					ヌマ	イケ
人工の水溜め、溜池					?	イケ

鏡味完二（1958）が示している地名としてのこれらの語形の近現代における分布範囲は、いずれも興味深い偏在を示している。西日本に偏るもの、東日本に偏るもの、東日本でも関東以北に偏るもの、また関東南部を境界として相補分布をなすかのよう分布している2語など、様々で独特の分布パターンを示している。それぞれについて、通時的な成立経緯に大いに興味をそそられる。これらについては、かつて部分的にその解釈に触れてきているが（参考文献の安部拙論参照）、本稿では、東日本に偏在しているのかのように見える【図3】の「サワ」に焦点を絞って以下検討していくこととしたい。

3 サワ（サハ）沢と、童謡「春になればしがこ（すがこ）も融けて」のシガ・スガとスワ（諏訪湖）

MAの言語史を研究する上で河川・水源地形名の有効性を指摘し、これまで日本語のナイ（安部2001.8、安部2004.7）、サワ沢（安部2000.12、安部2004.7）、ヌマ沼（安部2004.7.10）を取り上げてきた。ここではサワに焦点を当て、安部（2000.12）、安部（2004.7）以降、主に海外での学会発表で断片的に論じてきた小考を統合して^{注4}、詳述してみたい（安部（2025）も参照）。

河川名としてのサワは東に偏るが（鏡味完二（1958））、上代文献にあり西での使用も確認できる。東西に広く使われているこのサワは、西に偏る外来のタニよりも古いと解釈できる。河川地形名サワの同源語を近隣言語に探してみようと思うが、その前にまず

語形変化として存在可能な推定候補語形を、日本語内部資料による「内的再構成」によって可能な限り事前に列挙してみたい（従来の系統研究での語形引き当てではこのような視点が不十分と思われる）。

サワ sawa は、古語としてサハ saΦa、sapa のほか、以下の一連の語形が推定可能となる。

sapa の k-p 交替語形として*saka、この2語形の粗形として*sak**a*を再構成可能となる（北k-南p対応<*k*、安部（2025.3a））。古く有声無声の非弁別段階が推定されるので、これらの語形の有声音語形*saba、*saga、*sagwaも候補となる。それに現代方言の前鼻音語形やガ行鼻濁音の併存状況から*sa^mba、**sanga*、**sangwa*が推定可能（「*ng*」にてガ行鼻濁音[n]を略記する）。

ところで、上記*sagaに類似し意味的関連も認められる語に氷のsga・sigaが東北方言にある。川と氷とでは意味的連環が認めたいように思われが、冬季寒冷期が長期に及ぶ東北以北では川はむしろ冬季には凍った状態で認知されやすいということ、また、次のような意味転換が理論的には説明可能であることから、次の3点からこの語形も考慮すべきことがわかる。

①冬季長期寒冷地では小川・沼沢湿地は凍った状態で認知されやすくなる（認知論的解釈）。（寒冷地でサワの意味が氷結状態に特化する可能性がある。なお、サワの古い意味は広く小川や沼沢湿地と解釈されている。『日本方言大辞典』『時代別国語大辞典』）

②同一語形が、寒冷地（北部方言地域、安部1999.9）では南側とは異なる寒冷地特有の意味で使用されるという南北方言の類型的パターンが認められる【表2参照】。

③「川→氷」への表現上の意味転換も説明可能であり、類例がある。「(水源である川・沼スガの) 氷が凍る」→「氷が凍った結果としての氷シガ・つららスガ」への意味転換。類似例＝大地の意のナイ(ナキ)が地震へ意味転換。「大地(ナイ)が揺れる」→「大地が揺れた結果としての地震ナイ」への意味転換のパターン。

③は有名な例であるが、大地の意のナキが地震の意に変化したパターンで類推できる。すなわち、「大地」のナキは「ナキが揺(ヨ)り来(来)ば(武烈紀)」、「地(ナキ)震(フル)」（允恭紀）の表現を経ているうちに、その「大地ナキが揺れること」自体の方を表す「地震ナキ」（名義抄）へとわずか一時代で変化した。サハが寒冷地で「氷」へと変化することは十分にあり得るものと言えよう。

この「川・氷」の事例のように、同一語源語形が、気候の異なる地域において意味変化する現象として、フキ（吹雪＝風）（安部2003.3）とユキヤケ（北で凍傷「霜焼け」の意＝南では日焼）などの関係を挙げることができ（【表2】参照）。「吹く」の連用形名詞「フキ」は中央文献ではただの風であるが、方言の南北境界線の北部では吹雪の意味で使用され、フキは南ではただの「風」の意であるが、冬季に雪の多い北部方言で

【表2】 日本語方言の南北の気候差による意味の「寒冷地適応」(④フキは安部2003.3参照)

同形語	共通意味		北日本方言の意味		南日本方言の意味
	有標	(寒冷地特徴)		無標	
①ユキヤケ		皮膚炎症	凍傷	(いわゆる霜焼け)	日焼け【雪による】
②シミル	浸潤する	凍る		浸みる、染みる、沁みる、滲みる	
③サワ・シガ・スガ	水・水源	氷・つらら		河川・小川・湖沼沢地・湿地・水	
④フキ（吹）	風	吹雪		風【中古に複合語フキが生まれる】	

は雪まじりの風（「吹雪」）の意となった（南の地域は強調するために別語形フブキを生み出した）。地図は略すが、『日本語地図』LAJでは、「氷」のsga・siga、シガ・シガマは東北地方に分布し、「つらら氷柱」のsga類（sga・sganboー・sgama類）もやはり東北地方に分布している。南北方言における【表2】のような意味的類型特徴を指摘できる。名付ければ、言語の意味の上での「寒冷地適応」と呼ぶことができるであろう。このような方言地域毎の意味的変容の類型にも注意を向ける必要がある。

この氷のsga、sigaは、東北方言の中舌母音ではsüga、sügaとなり、鼻濁音でsung_a、sing_a、süng_aとなり、また上記同様*sung_a、*sing_a、*süng_aなどが推定可能となる。

また、サハとスガ、シガの母音に着目すると、同一語源であればサワのCaCa、スガのCuCa（C=子音、Caやそれぞれの中舌母音i、ü）の第1母音でu・üかi・iかaかいずれかが、それぞれに現れる可能性も考え得る。即ち、一例のみu母音で挙げれば、*suba、*sung_a、*suΦa、*suwaなど。さらに、サハでもスガでもシガでも有声音においては入り渡りの鼻音、つまり、*samba、*samba、*simbaなどが推定可能となる。これらを踏まえ、粗語形として、第1音節母音のa、u、ü、i、iの各々に近接する語源的共通の母音として仮に[a]を立て推定素語形を[*səng_awa]としておく（別案として北のuに周囲論を適用すると[*sung_awa]）。要するに、現代日本語のサハ、スガ、シガ3語形と日本語史や方言から「理論的に再構成し得る推定される候補語形の範囲」は次のようになる（一部は割愛）。

○推定粗語形 Proto-Japanese (PJ) [*səng_awa]（第2候補[*sung_awa]）^{注4}
[saw_a]、saΦa、sapa、[sug_a]、[sig_a]、*saka、*sakwa、*saba、*saga、*sagwa、*sanga、*sangwa、süga、siga、[*sung_a]、[*sing_a]、[*süng_a]、*sung_a、*singwa、*suba、*supa、*sugwa、*suΦa、[suwa]、*samba、*samba、*simba、etc.
この中のsuwaから水源となる実在地名「諏訪」（諏訪湖）を同源と推定できる。その後、同じく推定語形に該当する次の地名も同源である蓋然性が高いと解釈される（上記候補語形で□枠で囲んだ語形）。

○ suwa 諏訪、singa 滋賀（琵琶湖がある地名）、sungro (sung-a-u < suang·pu すがふ) 須郷・菅生（6章で取り上げる）

実在の地名が確認できることは、氷の意のシガ・スガを考慮したことと内的再構法との妥当性を補強する。さらに、これらの語形から同源として次節のオーストロネシア語(AN)の諸語形、およびアイヌ語(sar)^{註5}の河川名を導くことができる。

ところで、東北には、語源の「水」から経年変化して土着化した寒冷地特有の「氷」のシガ・スガが分布するが、一方で、スワ・サワの語形では氷・氷柱に変化したものが見られない。シガ・スガは、列島に定着してから時期が長いので「氷」に寒冷地適応し得た。その後に、河川名（小川・湿地）としてサワ（サハ）が広がるが、「氷」に変化していないところを見ると、それはかなり後代の別の段階の分布層である可能性が高いと推定できる。これらの意味の範囲に広狭の差（氷・氷 > 水）があることは注目される重要な点である。この場合、シガ・スガが古い分布層で、サワが新しい段階の分布ということになる。副題の意味するところはひとつにはこの点にある。

4 近隣言語での類似形態の河川名

4-1 オーストロネシア語の河川名 *sapa

本章では、近隣言語における類似形態を先行研究や各種言語辞書などに探り、列挙していくことにする。なお、オーストロネシア語については下記の Darrell T. Tryon (1995) の CAD、および、web サイト上の辞書である Robert Blust and Steve Trussel (2010) 「The Austronesian Comparative Dictionary Online」(<https://acd.cldid.org/>) を利用した。

◆ Darrell T. Tryon (1995) : CAD = Comparative Austronesian Dictionary: An Introduction to Austronesian Studies, edited by Darrell T. Tryon, Mouton de Gruyter, Berlin / New York, 1995.

◆ Robert Blust and Steve Trussel (2010) : ACD = The Austronesian Comparative Dictionary (ACD).

○ The Austronesian Comparative Dictionary Online

The Austronesian Comparative Dictionary (ACD) was created by Robert Blust and Steve Trussel and is the most comprehensive comparative dictionary for Austronesian languages ever compiled. The dictionary was originally hosted on a website designed by Trussel, and updated with content by Blust, until 2020 when, after Steve Trussel's unexpected passing, Blust sought to move the ACD to its current and more permanent site hosted by the Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology and managed by Robert Forkel. Approximately one month

before Blust's passing in 2022, responsibility for the maintenance of the content of the ACD, including the addition of new terms and editing of existing entries, was passed to Alexander D. Smith who began working with Forkel in late January 2022.

まず、AN における関連語形を辞書 CAD から列挙する（大文字はオーストロネシア語族(AN)での各言語の省略記号である）。

◆ 言語名略記号 : from CAD

Abriation: AN : Austronesian
PAN : Proto-Austronesian
PHN : Proto-Hesperonesian
PWMP : Proto-Western-Marayo-Polynesian

さて、この日本語「さわ」と形態と意味が類似し同源の可能性が高いと考えられる語形を、Austronesian, Austro-Asians, アイヌ語(AINU language)^{註4}の河川名(rivername)に求めてみた結果、現時点では以下の候補が見出せた(swampなどの広義の水源地形名も含む)。①②③の分類は、2音節目が①は両唇音 p・b のヘスベロネシア語派北方語群、②HN のそれ以外の η 形、③は f 形なので参考まで挙げたがボリネシア語派の言語である(母音は u・o・ɔ)。

Austronesians; 'river' ①*AKL suba? : AKLANON, cf.ABE2004.12,
: PALAWAN
*PAL sapa?
*KAG sūba? : KAGAYANEN
SAB sowang : BÂNGINGI SAMA
②*MUR suŋoy : MURUT (TIMUGON)
*BAT suŋe : BATAK TOBA
*MIN suŋay : MINANGKABAU
*IND suŋai : INDONESIAN
MAD suŋay : MADURESE
③*RTU scfu : ROTUMAN (Porinesian)

PHN: sungay

PWMP: sungay (cf. MGY=MALAGSY MERINA in CAD1995)

CAD (1995) の補注には、*を付した3言語に祖語形や次の語形と意味も挙げられている。意味も、「small river, water flow, stream, brook」など日本語の「沢」に近い興味深い指摘がある。これら小川の意味の語も広く集めていく必要がある。

①AKL Proto-Southern Philippines *suba2.

PAL sapa2 'small river'; sapa2 'stream, brook'.

KAG suba2 'river'; sapa 'stream, brook'.

CAD (1995) の祖語形一覧には、ヘスペロネシア祖語形 (PHN) は、sungay、西マラヤポリネシア語 (PWMP: Proto-Western-Marayo-Polynesian) の祖語形は、sungey とある。この *sungay が、先の sunga とほぼ一致する。いずれでも ŋ 形が推定されているので、祖語形と同じ ŋ 形の②群が古く、北方の①群は語形とその位置から判断して、ŋ 形から変化した新語形と推定される。つまり、①②の全語形が AN の少なくとも PHN *sunay に溯る同源語彙と解釈される。

上記①と②は PJN (日本語祖語) として上記推定語形に似てるものを選び出したものであるが、この検討によって、偶然の類似語形なのではなく同語源と解釈される 1 群であると解釈できる。特に①の北方語群では第 2 音節 p ないし b で、日本語サハの古形 sapa (ないし *saba) とほぼ同じであり、また、南フィリピン諸語 PSPH *suba2 と KAG suba2 も、スハ諏訪 <supa, *suba とほぼ同形と見なせることは注目される。また、理論的に探し出した氷の意の方言スガ・シガも、予想外であったであろうが、むしろこちらの方が PHN sunay に近似している結果となった。国内地名でもスハ諏訪、シガ滋賀、スガフ須郷・菅生が追加でき、その推定の妥当性とそれらの古さを裏付けた。日本語スガ類の語源としては PHN の語形が、またサワの語源としては北方の KAG や PAL での小川の意味の sapa/saba が現在最も蓋然性が高いと言える。

4-2 「サワ (沢)」の語源先行研究

これまでサハの語源[※]はどのように解釈されてきたのであろうか。遺憾ながら先行研究を網羅するには至っていないのであるが、ここでは、奥里将建、泉井久之助、川本崇雄、村山七郎の説を確認しておきたい。

サハは古くは、奥里将建 (1943) に、マライ語 sawa (h) 水田と比較されている (いま村山七郎 (1975) による)。

AN の専門家である泉井久之助 (1953) でも次のように、マライポリネシアの t と日本語 s の対応として水田の語形が挙げられ、同語源と見ている。奥里を受けるものであろう。

○ MP: t-日・s. (略) *tabah 《水を張った稲田、水田、沢》: Ml. Ja. sawah 《水田》, B. saba 《水田》, D. ma > n'awa-an 《とり入れをする》, 等。-日・サハ, *sapa (沢, 『倭名抄』, 『佐波』)

AN とアルタイ語の重層説を唱えた川本崇雄 (1993) は次のように、PHN の *saban 流れ口を挙げていた。

○ (前略) PHn *saban 流れ口 > WBM sawan (小川が*) 大川に流れ込む、Png sabán 河口、Mar saba、Ilk saban-an 河口、(後略)

これら河口にあたる単語は未確認であるが、水田とも関わるものか。

サハの同語源としてフィリピン語の sapa2 を挙げている点で村山七郎 (1978) は注目される。泉井 (1952) の説を挙げたあと、次のサハの相形を挙げる。

○サハの祖形は *nt'abah のはず (『引用者注: 泉井の挙げる MP: 原始インドネシア語の』 *tabah ならば、日本語でタハとしてあらわれるはずです。タログ語その他のフィリピン語 sapa2 「流れ」 (引用者注: 更に *bah 「洪水」と分析する)。この前後はやや文脈が込み入っているので簡略に記すが、村山はサハ (前後の MP の水田なども含め) の祖形を *nt'abah ととり、sapa2 も同源の例として挙げていようである。フィリピン諸語を同源と指摘した説は、現在管見の限りでは村山のみである。但し村山は、祖形と記して挙げた語形も、bah (洪水) と前部分に分析できるといってラッペルトンの説を支持している。上に見た HN の川そのものを指す語群は考慮されておらず、また CAD の祖語形 *su ŋay と異なる。CAD では 2 つの形態素には分析してない。

以上、系統論研究上重要である AN のサハの調査を報告した。拙論は、先行研究の確証が未だ不十分ではあるが、現在のところ AN との同源性について考証を試みた、最も新しくかつ蓋然性の低い説と考える。言語学関係者のご批判とご教授を請うものである。

興味深い点は、もし仮に AN の ŋ 形と p・b 形と異なる段階の語形であり (地図で示したように分布に地域差がある)、しかも、日本語での 2 つの語形 (サハと、シガ・スガ・スワなど) が日本内部での分化や派生でなく AN からの異なる伝播による拡大であった場合、日本語には AN からの異なる前後 2 段階の伝播があった可能性が高いことになる。

再構形祖語形としては挙げられていないが上掲の①群に見られる語形、中でも特に最後にあげた CAD の補注に複数みられる sapa は、古代日本語サハ sapa と同形であることは注目に値しよう[※]。また、インドにある Austro-Asia 語族の中の Munda 諸語の 1 つである Santali 語では saba である。この語形は、先に見た東アジアの以下の語形と、同語源の可能性も考えられる。

○ Santali ; saba (small river, by Campbell's English-Santali Dictionary)

cf. Japanese ; sapa, *saba (small river, swamp)

PAL (Palawan) ; sapa2 (small river)

KAG (Kagayanen) ; sapa (stream, brook), suba2 (river)

cf. AINU; sar

cf. *saba > ? 共通祖語形があるか? < sravati (SKT) > stream^{※5}

これら遠く離れた言語では母音 a が共通している。これらから推定される祖語形は
*saba < *sagwa (< *sargwa) < *sangwa とも考えられる。

4-3 アジアの他の河川名

このほかアイヌ語、シナ・チベット語族 (Cina-Tibetan) のチベット・ビルマ語派
Tibeto-Burman のタマン語 Tamang、同じくチベット語、ベトナム語、カンボジア語、
ビルマ語の以下の単語も関係する可能性が高い。今後、これらとの関係も検討していく
必要がある。

アイヌ語 (AINU) ; sar (< *sar · ga < *sanga) (swamp, by Slawick)

sa (river sides, by Batchelor)

sa (plain, by Batchelor)

sara (A plain covered with a kind of sedge, by Batchelor)

タマン語 (Tamang (= Murmi)) ; syong (river, CDLIHA1978)

チベット語 ; shur (shur) (as for ditch, 溝), Kitamura · Nagano1990)

ベトナム語 : sōng [so · ŋm ①] (river)

カンボジア語 : stuŋ [u = u + '] (river)

ビルマ語 : khyong [chauN:] (river)

一方、これらの中には中国語の「川」の方との同源語も含まれている可能性もあり、
検討が必要である。

これらの分布は、インドのオーストロ・アジア語、太平洋のオーストロネシア語から
東北アジアの日本語、⁵⁾アイヌ語まで及んでいる。アイヌ語とオーストロネシア語との関
係については、村山七郎 (1993) などでも指摘されてきている (村山七郎 1993『アイ
ヌ語の研究』三一書房参照)。

5 「内的再構成」語形の検討 : 「スワ、シガ、スカ、ソガ、スガ、スゴウ」
「内的再構成」によって得られた語形を見ると、諏訪湖のあるスワ、琵琶湖のあるシ
ガ (滋賀)、スゴウ (須賀、横須賀のスカ・スガ (須賀)、ソガ (曾我) 等が、地名学
での研究成果と照らし合せても同源の可能性が高い。以下、それらについて検討してお
くことにしたい。

なお、言語での意味変化には水辺にある関連事物への意味の「染み出し」現象が認め
られるから、スナ砂、ス洲、スゲ管等の検討も必要となる。スナ砂、ス洲、スカ・スガ
(須賀) など、多くは水辺に見られる砂洲語彙 (砂、州、スカ (州処) 等) や水辺の植
物 (スゲ管) なども、広義にはサワ沢と同源である可能性が高い。suka (横須賀のスカ)

< *sukwa, su 州 < suna 砂 < *sungwa.

5-1 「スワ」(諏訪湖)——鏡味完二 (1958) 図 254 「谷」や「湿地」の方言スワ

【図 10-①】「スワ」(諏訪) の地名分布図 : 鏡味完二 (1958) [Fig. 254 Suwa] 参照
サワの内的再構成による推定語形として、理論的に導き出した語形に suwa (スワ)
がある。地名の「諏訪」「諏訪湖」が意味的にも該当することを安部 (2004.7) で指摘
した。その後安部 (2004.12) 時点で、語形「スワ」が、河川や水に関係すると解する
先行研究を見出していたが、商業雑誌での紙幅のため、以下の記載を割愛していたので
ここに追記していく。なお、以下の阿瀬 (1935) 論文は故・鏡味明克先生より、御生前
の 2004 年時点でご教示いただいていたものである (ご霊前にご報告させていただきます
い)。

さて、先行研究での古い指摘には次の阿瀬利吉 (1935) がある。

○「元来このスワといふ語は湖沼河川の岸をいふ意味であり、諏訪神といふ御名の出
来た所以は、この御系統の神々が湖沼河川の岸で作稲遊ばされていた時代 (略)」
(阿瀬利吉 (1935)、以下も含め下線は引用者による)

豊富な淡水を得られる所が神名化されていくことは十分考えられるものの、「岸をいふ」
根拠は示されていない⁶⁾。

鏡味完二 (1957) には、「Suwa は水に縁のある地名であるが、湖岸や川岸にあるも
のが大部分であるから」とあり、「水に縁がある」の根拠が不明瞭であるが、文脈から
推して湖岸・川岸の地名が多いことから帰納しての解釈か。

また鏡味完二 (1958) 地図篇では解釈が進んでおり、図 254 に「suwa」(諏訪) は「谷」
や「湿地」の方言スワが地名になったもの。とする。スワは谷・湿地の方言であると
すれば、「サワ」とまったく同意となる。サワは上述のように上代文献にすでに「谷」「湿
地」の例があった。地名の諏訪の語源を「谷・湿地」のスワにあると最初に指摘した研
究と思われる。安部 (2004) でも佐渡方言に「谷・湿地」のスワがあることを根拠とし
て挙げたが、この鏡味氏の指摘も挙げるべきであった。安部 (2004) で「諏訪」との同
源の可能性から方言を探したところ、『日本方言大辞典』に「すわ 谷。湿地。新潟県
佐渡」が得られる。スワが谷の意も持つということは、サワが谷川を表すこととも一致
し同源性を示唆する。「諏訪湖」は巨大な水源としてだけでなく冬季の特異な氷結現象
「御神渡」でも水と氷の両面で強く認知されやすい。これらによって諏訪の語源 *sunwa
に湖の意が追加されることになる。このような一致は、上記のように推定祖語形を多
数あげたが、本稿での「内的再構成」の妥当性も裏付けている。

鏡味氏はこの全国方言スワが「西南日本では海岸、東北日本では内陸にある傾向を見
る」(鏡味 1958) とも指摘する。これらの研究は、諏訪湖を含むスハがサハと同源であ
ることを支持している。水源地形名でもあるスワは、巨大な水砦である「諏訪湖」を表

すにふさわしい語形でもあった、というよりも、大きな淡水スワ（湖）があるゆえに、その地域全体の名称が諏訪（「水」地方）になったということであろう。このスワとサワは同源語の異形態と見るのがふさわしいようである。

5-2 「シガ」(滋賀、志賀)：鏡味完二 (1958) 図 238 「Suka に由来する Sika」から

【図 10-②】「シガ」(滋賀、志賀)の地名分布図：鏡味完二 (1958) [Fig. 316 Yokosuka, Suka]

安部 (2004.7) では、寒冷地で水が氷結した「氷、つらら」も類義語として同源と推定し、シガ siga、スガ suga (共に氷、氷柱) を挙げた。推定語形スハが、巨大な淡水源である諏訪湖と同語形であることから推して、語形シガも琵琶湖を内に抱く滋賀の地名であることに気付く。湖沼沢水源としてのシガが、湖のあるその土地・滋賀の名になったということは十分に考えられよう。

このシガについて、鏡味完二 (1958) 地図篇の図 238 では、「Suka に由来する Sika が Si-nga となったと考えられる。」とする。しかし、スカに母音変化と濁音化を加えて変形させずとも、水 (源) 名としてのシガと同源と解する方が容易である。

鏡味完二氏が、suka (洲処) に語源を求め、Si-nga が水辺に関わる地名であると解している点は、シガが水源地名であると見る解釈とは意味の点では共通している。

ところで、巨大な湖と見る解釈は、河川の意からはやや遠く、そぐわないように見えるかもしれない。しかし、シガおよびスハが西日本の琵琶湖、やや東寄りの諏訪湖で、溪流の意よりも湖沼沢の意で残っている点は、同源のサハが古く上代でも (現代方言でも)、東では溪流・浅い谷 (= 溪谷) であるのに対して西日本では湖沼沢湿地の意で使われていることと傾向が一致しており (※)、むしろ歴史的東西差と一致している傾向と見ることができるとは思われる。

○※『時代別国語大辞典 上代篇』『さは』=「【考】現在のサハは、大体東日本では溪谷を、西では沼沢をさすようであるが、この二つはすでに【事例略】と【事例略】とに確かに指摘でき (後略)」(6-3 の引用部分も参照)。

サワは、『時代別国語大辞典 上代篇』のこの解説と用例を見る限りでは、東日本では「溪谷状河川地形名」を、西日本では「湖沼沢湿地状地形名」を指すようであり、古代の用例にも既にヌマ・サハ (東) とタニサハ (西) での東・西の区別がある (6-3 の引用部分も参照)。鏡味完二 (1958) にはヤザワとヤダニの 2 語形の地図 (【図 314】、本稿では地図略) が掲載されてヤは東西共有しながらもタニ・サワの東/西差を示している。西日本に、溪谷名として新たに外来のタニ (= タン tan) が拡大したために (タニの分布はより正確には「中輪 + 内輪」方言地域の分布をなす)、西では「谷状河川タニ - 湖沼沢湿地サハ・ヤ」という使い分け (意味分担) を生じたものと推察される (東では「溪谷状河川サハ - 沼沢湿地ヤ (ヤチ・タト・ヤツ)」の分布をなす)。古代

文献でタニサハ・ヌマサハの両形があるのは、その使い分けが西の中央語 (畿内の文献) においてある時期、過渡的に生じていた状況を留めていると解釈されようか。

改めて、この地名シガおよび後述のスガ、ソガ・スガの存在と、サワ・スワなど水に関わる語形との意味的関連の強さから見て、氷・つらのシガ・スガとサワとを関連づけた前稿の妥当性がより補強されたと言えよう。

5-3 「スカ・ヨコスカ」(suka < suga < *sungwa か)：鏡味完二 (1958) 図 316

【図 10-③】「スカ」(州処?)、suka < suga < *sungwa か? の地名分布図：鏡味完二 (1958) [Fig. 316 Yokosuka, Suka]

鏡味完二 (1958) では「洲のある所」の意。」とあるのは即ち「州処 = スカ」と解している。一方、この語形は上述の内的再構成によって得られた語形のひとつであるスガからも「*sungwa、*sugwa > suga > suka」のように自然に無理なく推定可能な語形でもある。また、「*sungwa、*suga」は AN 語にも実在している語形でもあった。「横須賀」の地名は川 (川州)、海浜の近くとは限らない。「水」(川、海、湖沼) の「横」(水辺) を指す地名と見る方がその多様な範囲に相応しいように見える。しかし、川・海・湖いづれの水辺にも「砂」や「州」はつきものであるもので、語源がいずれであるかはここではひとまず未詳とするしかない。

因みに、「スガ」にまつわる『古事記』での地名「スガ」の古い地名起源説語に興味深い「水」との関連が見られるのであけておく。須佐之男命は八岐大蛇を退治した後、住む土地を探し出雲国 (須賀) に来て「爾に須賀のところに到り坐して詔りたまはく、『吾此地に来まして我が御心須賀須賀』とのりたまひて、其地になも宮作りて坐しましける。故、其地をば今に須賀とぞ云ふ。」として、有名な「八重立つ」の妻籠めの歌を詠む。その宮の地を伝承する今の須賀神社は山中にあるが、大きな湖である矢道湖の南側にある。湖の近くは住みやすい環境でもあり「すがすがしい」土地でもあったであろう。

一方、それは記紀神話の影響ゆえに、後に須佐之男命に結び付けられたものであって、本来の神社は、『出雲国風土記』大原郡条に記載されている「須我社」に比定され、大原郡海潮郷の伝承に登場する須義禰命が本来の祭神であったともされる (Wikipedia「須我神社」はか参照)。この「須賀禰 (命)」は「スガ + ネ (接辞)」(須我の地主神) の意であるが、そこにも、海水や水の神に関わる伝承や解釈がある。『出雲国風土記』海潮郷には「古老が伝えて言うには、宇能治比古命 (うのぢひこ) が、御祖 (みおや) の須義禰命 (すがね) を恨んで、北の方の出雲の海潮を押し上げ、御祖神を漂わせた時、ここにその海潮が至った。だから得塩 (うしお) という。[神龜三年に宇を海潮と改めた。]」とある。この点では「(海) 水」と関わり、あるいはまた、「海潮温泉近くに残る海水の侵食を受けて削られたようにも見える岩が神話の成立に関わっていると説くや、スガ

ネを母神と見る立場からは山の女神と水の神による対決と考える説が提唱されている。」と「水神」との関わる解釈が提示されている (Wikipedia「スガネ」)。これらの諸特徴は「砂」よりもむしろ「水」とのつながりを示唆しているようににも思われる。「スガススガシ」という地名神話よりも、一層「水」と関わる (地主) 神名と結びつく「古語形」として興味深い。

5-4 「ソガ・スガ」(曾我・須賀) (「スカ」と同源の「スガ」): 鏡味完二 (1958) [図 10-④]「ソガ・スガ」(曾我・須賀) の地名分布図: 鏡味完二 (1958) [Fig. 250 So-nga・Su-nga]

安部 (2004.7) では推定語形 suka、スゴウ sungou との語形・意味との近さからスカを検討してみた。スカは『日国2』では「[州処 (すか)] か」とある。鏡味完二 (1958) (科学編) では「Suka は『州のある処』の意」とあり、鏡味完二 (1958) 地図篇では「図 250 ソガ (曾我)・スガ (須賀)」において「名義は砂地」とする。「ス」を砂と同源と見ているが、「スガ」自体が「シガ、スガ」(氷、川、水) と同源である可能性がある。その場合の意味の派生としては、「同じ場所にある他の事物への意味のスライドあるいは染み出し」を起こし、「河川内にある砂や中洲 (ス)」を表すようになったものと解釈できる。「砂の語源も suma < sunga (スガ)」である可能性が高い。

5-5 「スゴウ (須郷、須川、菅生)」: 鏡味完二 (1958) 図 253

【図 10-⑤】「スゴウ (須郷、須川、菅生)」の地名分布図: 鏡味完二 (1958) [Fig. 253 Su-ngô]

意味が同じ谷で語形が類似する地名にスゴウ (<スガ・フ) がある。鏡味完二 (1958) 地図篇「図 253」では、「[Su-ngô (須郷・須川・菅生)] は「比較的小さな谷」に与えられた名。」とし、やはり「谷」を表す語形と見ていることがわかる。第2音節目が o 段で推定語形の範囲からはややずれるが、語源的には a 段の「スガ」+「フ」(「生」か接尾辞か) と考えられる (あるいは「フ」は延音か)。その語形と何よりも意味から見て、サハ・スハ・シガと同語源と見なすことができよう。氷のスガとの同源を補強する語形となる。

6 「さわ」(沢) の言語地図および他の河川名との史的前後関係

4 章、5 章の事例を踏まえて、「さわ」(沢) の語形を言語地図化したのが【図 9】である。日本語以外の諸言語での各語形の歴史的的分析は今後の課題である (安部 (2025) も参照)。

さて、サワについてはおおよそ以上になるが、他の河川名との前後関係について、現在まで拙論で考察してきたの見通しを以下に述べておきたい。

6-1 河川名の重層と地域差

河川名の重層と地域差については、現時点では以下の表のような見通しをもっている。その中に今回のサワ・シガを位置付けてみた。紙幅がないので備忘的に記載しておくことをご了承いただきたい補注。

なお、表 3・表 4 の河川名語形すべての分布を見わたして注意される点は、方言の分布パターンにおけるいわゆる「南北分布型」がない点である (意味上の氷・氷柱での北方分布は別とする)。全国方言分布の主要パターンには「東西分布型」「ABA (外輪-中輪-内輪) 分布型」「南北分布型」があり、河川名 (水名) 語彙には前 2 者のパターンはあるものの、南北に偏ったり南北で対立したりするパターンは今のところ見出せない。それは即ち北ないし南から (かなり古い段階に) 列島の南北一方にのみ語形が広がるというパターンはなかったということを示唆するのか、果たしてどのようなことを意味しているのか、今後の課題としていきたい。

【表 3】 河川名の重層 (仮説)

	底層	⇒古層	⇒中層	⇒上層	
河川・溪谷	ナイ (アイヌ語にあり)	(ヤ類) ⇒	サハ	⇒タニ	(カハの位置未詳)
湖沼沢湿地	ヌマ・ニタ (アイヌ語にあり)	⇒ヤ類	⇒シガ→サハ	⇒イケ	(ヌタ未詳、アイヌ語にあり)

* あくまで地名としての分布範囲であるが (鏡味完二 (1958) 地図)、通地名としてヌタ・ニタは北陸・中部・近畿北部・中国を除く周囲分布、ノダは全国分布をなし、イケはおよそ南関東以西に分布している。

【表 4】 河川名の地域差 (暫定的概観)

	【東西】	九州	中日本 (利根川以南)	東日本	古代文献
【河川・溪谷】	ナイ	タニ ~ タニ	サハ	サハ (*糸浜線以東)	タニサハ
【湖沼沢湿地】	ヤ類	サハ (**三宅島-佐渡以西)	ヤ	ヤ (*神奈川新潟以東)	ヌマ・サハ

(*分布範囲は中部東海関東と九州で複雑に重複している)

(**サハは「小川・低地・窪地」では静岡までの西の分布か?)

また、語形サワとシガ・スガとは共に AN 語との同源語の蓋然性が高く、共に少なくとも本州以南での全国規模の分布を示している (3 章末尾に解釈したような拡大・定着時期の大きな相違は想定されるが)。一方、日本語の方言分布パターンには、アクセント分布 (京阪式) と「ヨム」(読、詠、数える、節等の意) の分布範囲に見られるような、南方文化との連続性を示す分布 (※) もある (※【図 11】「方言圏 a」: 安部 (2023) 参照)。この方言圏 a が南方言語の影響によるものである場合には、それと分布範囲が

異なるサワやシガ・スガのAN語の影響とは別のもの、2段階の別が想定されることになる。副題にはさらにこの場合の意味も二重に含めている(3章末尾参照)。畢竟、それらのことは、つまり日本語への南方からの言語的影響は(AN語だけとは限らないと考えているが)、1度や2度などの単純に数え得るようなものではないことを示唆しているのではあるまいか、と今は考えている。

6-2 「ヤチ」類の重層と時代差—「ヤチ・ヤツ・ヤト」と「ヤノ・ヤハラ・ヤダ」—
「ヤチ谷地・ヤツ谷津・ヤト谷戸」は語源は「jat」²⁶と再構成される。神奈川新潟能登以東と九州中部以南に目立ち、ヤの語幹を共有する同源語の「ヤノ谷野・ヤハラ谷原・ヤダ谷田」は、同様に湿原に関わるものの中日本分布をなす(いわゆる「内輪+中輪」方言地域、鏡味完二(1958)地図参照、いま略す)。

この分布からは、「ヤ(谷)+タ行子音」=「jat」の古い複合語である前者が周囲分布をなし、後者の新しい複合語が中日本地域に残存したものと推察できる。

興味深いのは、前者の複合語後項「ツ津・ト戸」が狭い地点を指す語であるのに対して、後者のノ・ハラ・タ(野・原・田)ではむしろ広い面的エリアを表す語に変化している点である。これは、同じ湿地という地形でも、新しい史的段階の分布と考えられる中日本地域の段階において、生活空間がより「原」「野」「田」のように広く把握されるようになったことの現れと解釈される。「谷野」「谷原」「谷田」の語形と分布範囲とは、その時代に、人間の活動範囲なり共同体の領有領域なりが前時代よりも拡大したことを投影していると推定される。

6-3 「サワ」の東西(ないし新旧)での意味差とタニとの前後関係

広義の「サワ」には、「水」を表すシガ・スガ段階と溪流・湿地を表すサワ段階との2段階の可能性があり、さらに、語形「サワ」になってから「湖沼沢湿地」を表す段階と「溪流・谷状河川」を表す段階との2段階の可能性もあるという複雑な問題が残っている。

まず後者の問題を地名「サワ」の分布をヒントにして考えてみると、地名としての「サワ」は、鏡味完二(1958)の地図で見える限りにおいては、所謂糸井川・浜名湖線を境にして東に偏る(鏡味完二1958、安部1999.3も参照)。サワは既に上代には広く使用されているようで、実際には文化的中央である西の畿内の文献資料でもごく日常的な語彙として使われていたことは、その用例・用法から見ても確実である。

ひとつの課題は、地名として西に定着しなかった理由であるが、類義語タニとのほぼ相補的な分布からはタニの影響と推察可能であろう。新しい外来のタニが、谷状河川名・溪流名として西に広がり定着していったため、やや意味が広い類義語であるサワは、溪谷などの地形名や溪流名としては西では定着できなかったということではないだろう

か。一方、タニの浸透が遅れた関東以東では古くからのサハがそのまま定着していったものと考えられる。

仮にそのように考えられるならば、上代や現代までのサワが西日本では「湖沼沢湿地」名として定着しているのは、その意味での定着時期が、語としての日本列島での歴史的新旧はひとまず別として、少なくともタニが溪谷名をなつてサワの「溪谷・溪流」の意味を飲み込んでしまつて、サワが「沼沢湿地」だけの意味に限定されるようになって以降の段階と推定されることになろう。

そのように解釈することによって、先に引用した『時代別国語大辞典 上代篇』が指摘している東西での相違がより良く理解される。再掲載するが、上代の文献例ではサハの次のような二様の意味が指摘されていた。

○「現在のサハは、大体東日本では溪谷を、西では沼沢を指すようであるが、この二つはすでに第一、二、五例と第四、六、七例とに確かに指摘でき、特に第九、一〇例新撰字鏡の溪(タニサハ)と陂(ヌマ・サハ)とに明らかである。」[用例略]。

現代語のサワは、地名での東への偏在とは異なつて、東西で使用され、微妙に相違が見られるようである。国語辞典のレベルでは「1 浅く水がたまり、草が生えている湿地。

2 山あいの比較的小さい溪谷。「一登り」(『デジタル大辞典』)のようにあるものの、1と2が東西差を含むのかは読み取れない。しかし方言分布では、例えば、『日本方言大辞典』をみると、「③小川」で静岡・愛知の西日本、「⑥浅く水がたまり、草の生えている湿地。山間の湿地。沼地。」(上記の1の意味)としてやはり兵庫・奈良・鳥取・徳島・岐阜・三重の西日本があがっている。この「③小川」が1の湿地というよりも、実際は2の溪谷に近いものを含むのかもしれないが1と2の中間的でもある、静岡・愛知という位置でも言わば東西の中間地帯での中間の意味と言えなくもない。より古いタニの意味は、西の方での沼沢湿地と東での溪谷・溪流という東西での意味を併せ持った「広い意味での中規模以下の河川・沼沢湿地」の意味であつたと推定される。地名サワを上記の「2 溪谷」や「谷川」と解釈するのは、タニが浸透して対比されるようになった後の段階での一面と見ておくことが出来るように思われる。

河川名としては、ほかにナイ、ヌマ、タニほか語形の分析が残されている(安部(2025)も参照)。あわせて今後の課題としていきたい。

【注】

- 1 最新の情報については安部(2025.3)参照。
- 2 「MA 中央気候境界線」は中国「秦嶺・淮河線」と重なる)・朝鮮半島・日本列島内(「南北方言境界線」)を東西に横切る気候・言語・文化境界線への安部による仮称である。

○「秦嶺・淮河線」(Wikipediaでの記載より) = 「秦嶺・淮河線(しんれい・わいがせん)は中国東部における年間降水量1000mmのラインのことである。秦嶺・淮河ライン、チンリン・ホワイ線ともいう。ちょうど年間降水量1000mmの等量線が秦嶺山脈と淮河を結ぶ線と一致することからこの名前と呼ばれ、一般的にこの線より以北が小麦地帯、以南が稲作地帯とされている。耕作穀物の違いが、食文化の違いも産んでおり(中略)。中国では秦嶺・淮河線が800mm等降水量線であり、1月の0度等温線である。伝統上これを境に、「南北」が分かれる。気候が大きく異なると共に農業生産や生活習慣が大きく異なる。」

3 以下参考まで、「水名」の名称を見出しに立てる Wikipediaでの記載より。

○「水名(すいめい、英語:hydronym)は、水域の固有名である。hydronymの語源は、ギリシア語 *ὕδωρ* (ラテン翻字:hydor:「水」)と *ὄνομα* (ラテン翻字: *onoma*:「名前」)である。また水名学(すいめいがく、英語:hydronymy)は地名学(地名の分類学的研究)の一分野であって、水域の名前の研究であり、それらの名前の起源とそれらがどのように歴史を通じて移転されていくのかの研究である。水名には河川、湖沼、さらには海洋要素の名前を含む場合がある。」

4 本稿はこれまでサワや河川名について断片的、断続的に報告してきた次の拙文を統合し、加筆してまとめなおしたものである。安部(2000.7、2001.8、2001.11、2003.3、2003.4、2003.7.29、2003.7、2004.7、2004.7.10、2025、2025b)。なお、副題は映画「郵便配達は2度ベルを鳴らす。」より(映画と映画の内容は無関係とすることである)。

5 さらにわれわれは、これらが特に北方で一音節化した場合を可能性としては推定する(参照、na < *nahdi. 安部2003.7)。例えば *sawa > *sangwaの一音節化からは、*san、*sat、*sad、*sar、*saが推定可能となる。この理論的推定語形によつて、sar(葦原・湿地、アイヌ語)、sar・sa(「沙」水辺の砂、中国語の「沙(砂)とは水中の散石なり。」「説文」)、*sar(沼地帯、「エミシ語」Slawik説)が、この理論的射程範囲に入っている言語であるということが確認できることになる。安部(2003.7)の注7に関わって備忘として記しておく(安部(2025.3c)補注も参照)。MA圏の祖語形を再構成していくと、極めて奇妙なしかしいへん興味深い現象を見出す。はじめは単なる偶然かと疑ったがその事例は1つずつ増えている。そのいくつかを安部(2001.8)で列挙した(下記◆部)。サワにおいても同様の現象を見出しているので指摘しておく。SANSKRIT sravat > Eng. stream (= 'small river')。この現象については今後も注目していきたい(安部(2025.3c)補注には他の事例もある)。

◆河川名のほか、次のような類似する基礎語彙においても、この範囲に周縁的分布が指摘できる。生活語彙 川 *nahdi、矢 *sad、犬 *seta (ハンダ語と

アイヌ語) 身体語彙 手 *ti、目 *mat (安部(2001.8))

7 鏡味明克氏も、阿瀬氏のこの語源の根拠は要検討であると付言された(2004年私信)。引用部に続いて「スア神を逆語でアシ(葦)神と称ぶ様になり(中略)斯くて、「悪神(アシガミ)」といふ語義が確立する。」とあり、牽強な俗解へと続いているので紹介に留める。

【補注】

【表3】【表4】の河川名のうち西日本側に偏在する「イケ」と「タニ」については、以下の引用資料(●印)のような史学的解釈があるので、それに基づいた次のような解釈が可能である。

(1) 「イケ(池)」:環濠型(用水池併存型)の古墳の拡大

イケの語源として最も蓋然性の高いのは「生け」とする解釈であろう。『岩波古語辞典』は「『生け』の意」とする。『日国2版』『語源説』には「(1)イケ(生)の義。魚を生けておくことから〔桑家漢語抄・日本釈名・箋注和名抄・雑問随筆・和訓栞・大言海〕。(略)(3)ひでりに水をいけておくために掘るものであるから。水が涸(か)れるのに対し、イケ(生)というのか〔和句解〕。があるが、養魚の為の「生け(養)」に限定されると見るよりは前田富祺監修(2005)『日本語源大辞典』に「地名におけるイケの分布が西日本に偏在し、それらが稲作関係の地名や普及範囲とも重なることから、イケは必ずしも養魚に限らず、人が生く(生きる)ためのもの、あるいは水を生かして(涸らさないで)おくものとも考えられる。」とするように、まずは飲み水用・灌漑用と見る方が適当であろう。地名におけるイケは掲載した【図5】のように南関東以南に偏在する。その点で広くは弥生期以降の諸文化分布図との相関性が認められる。地名自体の定着時期は未詳であるものの、「定着」の契機としては元明天皇の和銅6(713)年の「諸国郡郷名著好字令」(畿内七道諸国の郡郷には好字を用いよ)がひとつ大きく影響した可能性があらう。また、西日本規模におよぶ用水池という発想とそれが普及する原動力という点からは、広域への大規模な伝播・拡散を可能にした文化的現象として「古墳築造」が考えられる。それと併行した環濠による用水池の社会的役割を結びつけて解釈する井上秀雄(1972)の下記のような解釈を参考にするとすれば、環濠型(用水池併存型)の古墳の拡大と定着の時期が、水源イケとその語形の伝播時期のひとつの目安となる可能性があると考えられる。

●【資料:井上秀雄(1972) p.100-101.】

「それに反して古墳の築造は支配権力に有効な働きをした。その相違がどうして生じたのか。(中略)具体的に想像すれば、邪馬台国の国家形成はまだ部族国家の段階で、丘陵の突端に木を切り白石を葺いて王者の権威を宗教的に誇示した。この際、たんに

古墳の築造にとまどまらずその周囲に堀を掘り、農業用水を兼ねさせた。この時代の日本人は用水池の堀まで含めて神聖な古墳と考えていたであろうが、堀の経済的効用が古墳造営に重要な社会的意味を持たせた。そのような考えはこの社会がまだ共同体的性格であることを示している。」

(2) 「タニ (谷)」: より高地での居住現象と高地性渓谷状地形名の新語 (外来語) の受容
タニ (外来語) が、溪流・湿地・小川のサハや類義語のヤ (ヤチ、ヤト類) が既に使用されている領域になぜ定着し得たのか、という点が問題ともなる。新語が入り込める余地は実態的にも意味的にも、隙間・空き間がなければならぬ。現代語ではどちらかというとタニはその渓谷状の地形に、サワは水があることに意味の重点がある (例えば、タニ底の村・タニあい [×沢底、×サワあい]、サワには魚が多くいる、サワ登りをし、水に落ちた [タニ登りは斜面側の登攀?]、涸れサワ [? 涸れタニ])。タニがより高地や山間の奥地の形状を指している点と、サワの古い意味を留めるとみなせる東北では《谷川一山間の湿地 - 沼地》と意味の幅が広い点とを考え合わせると、西日本側で、何らかの事情でより高地の丘陵の溪谷名が必要になった段階が想定される。その点を考古学上に求めれば、所謂「高地性集落」の出現との関係が目される。高地性集落という名称には史学的定義があるのでひとまず別に置くが、タニという新語の受容にはそれに類するより高地の溪谷状地形名が求められるようになったという背景が容易に想定される。半島部からの渡来系の移住者の一部が、下記の井上秀雄 (1972) にあるような、例えば平地よりもより高地での居住習慣がある文化を持っている人々であった場合、かれらが外来語としてより高地での地形名 (tan) を持ち込むこととなり、それは後代には従来からある低地溪流名サワとは使い分けを伴いつつ併用状態を作り得たことであろう。例えば先の高地性集落は弥生時代中期以降、西日本に多い集落であり、タニの西日本偏在とも符合する。

● [資料: 井上秀雄 (1972) p. 66-67.]

「この傾斜度のゆるさは流域の排水を遅らせることになり、その河岸の沖平野が近代まで農耕地として利用できなかった理由でもある。弁韓・辰韓の小国はかなり上流まで落東江を避け、その水位より一〇メートル以上も高いところに位置している。次にこの地方の【引用注: 朝鮮南部の特に辰韓・弁韓の】いま一つの地理的な特色には、盆地や谷あいが多いことである。類型的にいえば、現在の郡、おそらく辰韓・弁韓時代の一小国は、三〇〇〜七〇〇メートル程度の山に囲まれ、その中を五〇メートル後の丘陵が、各面 (群) の下の行政区域。^{*}日本の村にあたる) を分断している。【中略】落東江やその支流などによって作られた沖積平野が少しはあるが、この沖積平野を部分的にしる農地として利用するのは、近世の朝鮮王朝時代になってからである。【中略】落東江が超緩傾斜であるため、その雨水はこの沖積平野に停滯する。【※ 66 頁「こ

の傾斜度のゆるさは流域の排水を遅らせることになり】そのためせつかくの沖積平野が農地にならず、この点が日本の古代農業ひいては古代国家と大きな違いを生じた理由であろう。

【参考文献】

- あべせいや (1997) 『日本語のルーツを探ったら』アリス館
ABE Seiya (1997.7.28) 'Several Strata in the Historical Formation of Japanese Dialects', (Proceedings of 2nd International Congress of Dialectologists & Giolinguists: The International Society for Dialectology and Giolinguistics (国際方言学地理言語学会 第2回国際大会口頭発表))
安部清哉 (1999.5) 「東西方言の諸相と日本語史の課題」『日本語学』18-5 明治書院
安部清哉 (1999.9) 「日本列島におけるもう一つの方言分布境界線 “気候線”」『玉藻』35
安部清哉 (2000.3) 「拙論の補足説明と誤植訂正」『フェリス女学院大学文学部紀要』35、「秋田方言調査のための語彙表台帳」付載
ABE Seiya (2000.7.24) 'On the Historical Formation of the Japanese Language and Its Dialects' (Proceedings of 3rd International Congress of Dialectologists & Giolinguists, 2000・7・24~7・29 in Lublin: The International Society for Dialectology and Giolinguistics, (国際方言学地理言語学会第3回国際大会発表原稿集))
安部清哉 (2000.11) 「日本語史研究の一視点——方言国語史の視点から——」『国語論究 8 国語史の新視点』pp1~38、明治書院
安部清哉 (2000.12) 「方言分布と日本語史」『国文学解釈と鑑賞』65-1、824、至文、平成 12・1
安部清哉 (2001.8) 「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関」『韓国日本學會 (KAJA) 第63回學術大會 Proceedings』
安部清哉 (2001.11) 「東アジア (日本語・韓国語・中国語) の河川地形名の偏在と方言分布・気候との相関配布地図・補論」『玉藻』37
安部清哉 (2002) 「方言地理学から見た日本語の成立——第3の言語史モデル理論としての “Stratification Model” ——」『方言地理学の課題』明治書院
安部清哉編 (2003.3) 『日本語の方言分布境界線 (関越線・気候線) による方言の重層性に関する基礎的研究』平成 13・14 年度科学研究費 (基盤研究 (C)) (2) 成果報告書、私家版、pp.1~196
安部清哉 (2003.4) 「日本語の河川地形名の重層とその背景としてのモンスーン・アジア言語の方言境界線【要旨】」『国語学』54-2、pp.131, [安部 (2002.11) 『国語学』掲載用「発表要旨」]

ABE, Seiya (2003.7.29) Dialectical/climatic features and distribution of terms for water-courses in Asian languages: the case of Japanese, Korean, and Chinese, Proceedings of XVII International Congress of Linguists, CIL, in CD-ROM, Prague, CIL17, 安部清哉 (2003.7) 「関東における日本語方言境界線から見た河川地形名の重層とその背景」『国語学』54-3

安部清哉 (2004.7.10) 「日本語の境界とモンズーン・アジアという世界——水源地形名 numa < *nub (沼・泥) の言語分布——」『韓国日本学連合会第2回国際学術大会 Proceedings』

安部清哉 (2004.7) 「地名と日本語」『国文学解釈と鑑賞』69-7

安部清哉 (2023) 「日本語方言における種の「方言圏」の課題」『文学部研究年報』69
安部清哉 (2025.3a) 「東アジア言語 (日本語・中国語・朝鮮語) の南北方言におけるある種の音韻対応 [k・x-p] < [*kʷ]」『人文』23.

安部清哉 (2025.3b) 「水名 (河川名) 「サワ」 (沢) 「シガ」 (氷) 小考」『学習院大学国語国文学会誌』68. (本稿)

安部清哉 (2025.3c) 「日本語の河川名の重層的形成とモンズーン・アジア最古基層 (副題略)」『文学部研究年報』71.

ABE, Seiya (2025) The Classification and Division of Japanese Dialects, *The Handbook of Japanese Dialects*, Kibe, Nitta and Sasaki edit., De Gruyter Mouton, Berlin.

CAD (1995) = Comparative Austronesian Dictionary. An Introduction to Austronesian Studies, edited by Darrell T. Tryon, Mouton de Gruyter, Berlin / New York, 1995.

Frobenius, Leo (1938) *Das Archiv fr Folkloristik*, Paideuma 1.

W. W. Hunter (1868, rep. 1978) A Comparative Dictionary of the Languages of India and High Asia.

H. Krahe (1954) 『Sprache und Vorzeit』

阿瀬利吉 (1935) 『日本地名の研究』東和出版社

泉井久之助 (1953) (1952?) 『民族学研究』17-2, いま泉井 1985 による。

泉井久之助 (1985) 「日本語と南島諸語——系譜関係か、寄与の関係か——」『日本語の系統・基本論文集1』和泉書院

井上秀雄 (1972) 『古代朝鮮』日本放送出版協会 (今 2004 年講談社学術文庫版による)

大林太良 (1975) 『神話と神話学』大和書房

大林太良 (1999) 『銀河の道 虹の架け橋』小学館

奥里将建 (1943) 『古代語新論』三省堂, pp.485 と村山 1975 に引かれる。

落合いずみ (2024) 「アイヌ祖語における「川」の再建——アイヌ語地名「十勝」「空知」の由来とともに——」『言語記述論集』16.

落合いずみ, Ochiai, Izumi (2024) "River" in Atayalic and "fresh water" in Proto-Austronesian, *Journal of the Center for Northern Humanities*, 17, 北方人文研究 17, 1-13.

鏡味完二 (1957) 『日本地名学 科学篇』日本地名研究所、東洋書林原書房

鏡味完二 (1958) 『日本地名学 地図篇』日本地名研究所、東洋書林原書房

川本崇雄 (1993) 「日本語・オーストロネシア語比較語彙表 (4)」『英語文学研究』32、創価大学英語英文学会

宋 敏 (1999) 『韓国語と日本語のあいだ』草風館

竹岡俊樹 (1991) 「旧石器時代の石器分析からみた左右差の起源と発展」『左右差の起源と脳』朝倉出版

都 守熙 (1977) 『百済語研究』亜細亜文化社

朴 炳采 (1968) 「古代三国の地名語彙攷 (副題略)」『白山学報』5

村山七郎 (1975) 『国語学の限界』弘文堂

村山七郎 (1978) 『日本語系統の探求』大修館書店

李 基文 (1975) 『韓国語の歴史』大修館書店

李 芳漢 (1983) 『韓国語の系統』三一書房 (原書は韓国)

【本研究に関係した科学研究費等の研究助成金】

○平成 13 年度フェリス女学院大学共同研究費「東アジアにおける異文化接触と文化・言語・コミュニケーションの受容・変容に関する基礎的研究」(代表者: 安部、120 万円)

○平成 13-14 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) (課題番号 13610492、代表者: 安部)

○平成 15-17 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2) (課題番号 15520298、代表者: 安部)

○平成 16-18 年度科学研究費補助金基盤研究 (B) (1) 「日本語史の理論的・実証的基盤の再構築」(課題番号 16320059、代表者: 金水敏)

○2023-2024 年度学習院大学東洋文化研究所一般研究プロジェクト (河川名の研究)

【図1】「モンソン・アジア文化圏」の領域地図および「MA 中央気候境界線」(MA-ABE-LINE)
(安部 2003.7)

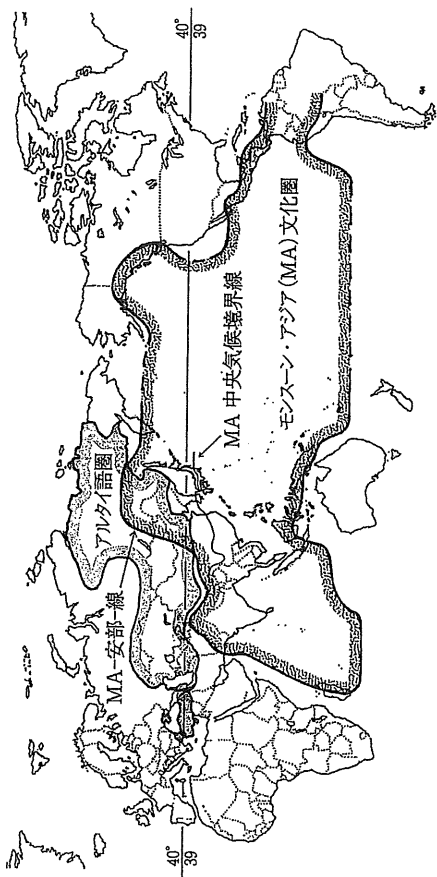
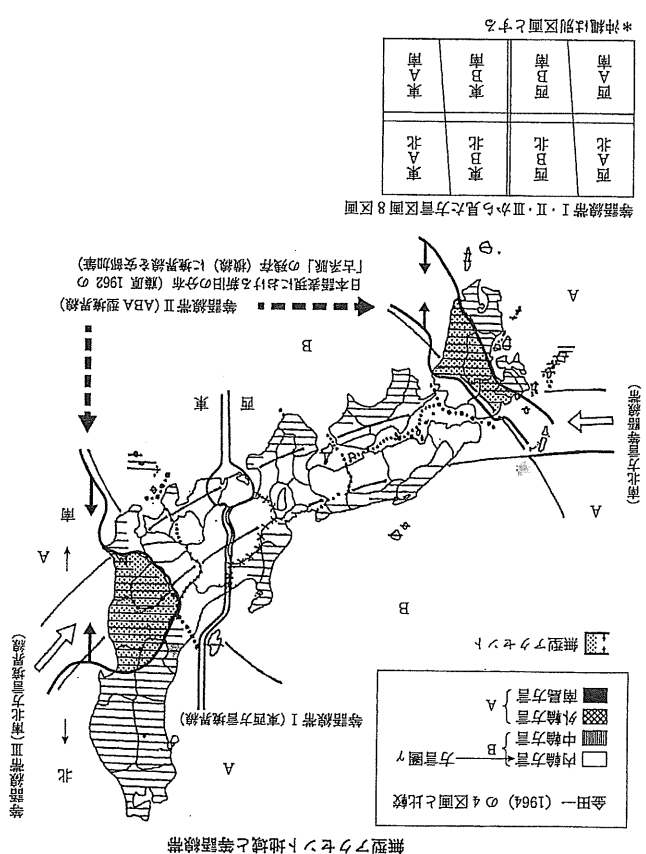
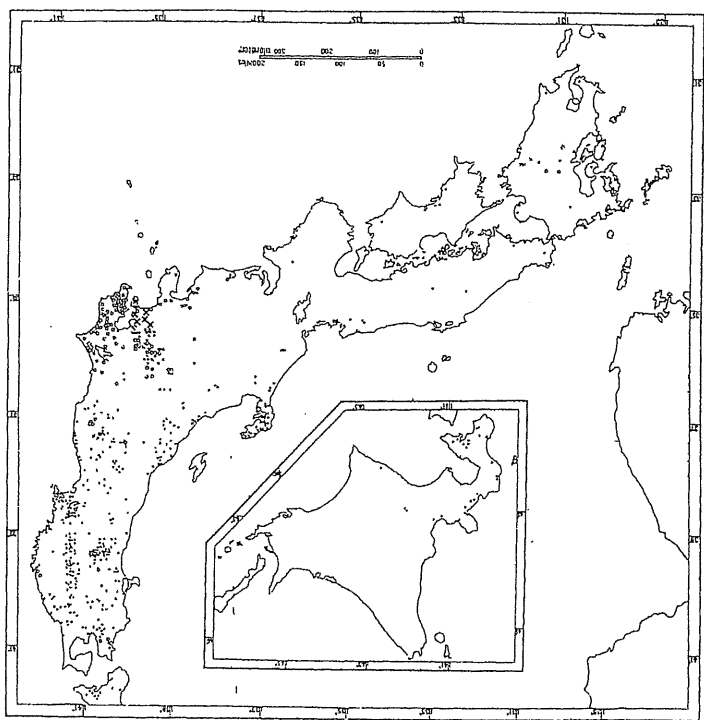


図 モンソン・アジア (MA) の領域 (安部 2003.7)
(アルタイ語圏と重複する領域に注意)

【図2】日本の方言の主要な分布境界線 (安部 (2024))



【図4】ヤチ・ヤツ・ヤト (谷津、谷戸) の地名分布 饒味亮二 (1958)



「湿地」の地名

【図3】サワ (沢、さば) の地名分布 饒味亮二 (1958)

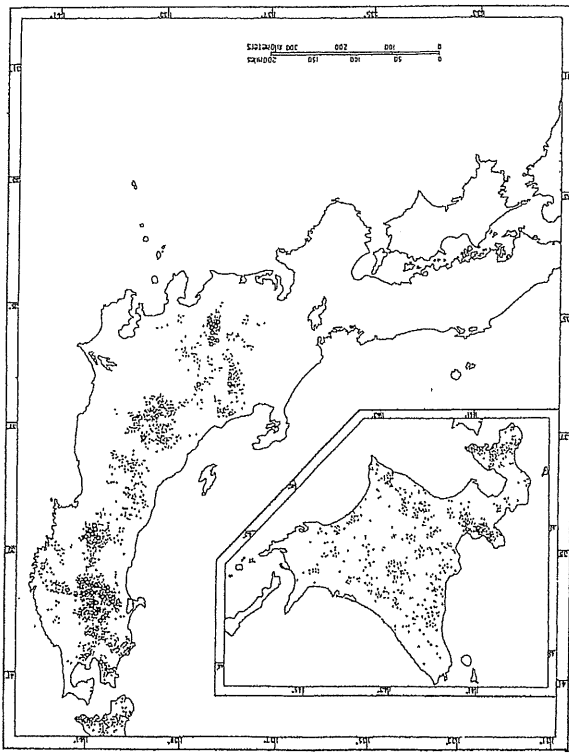
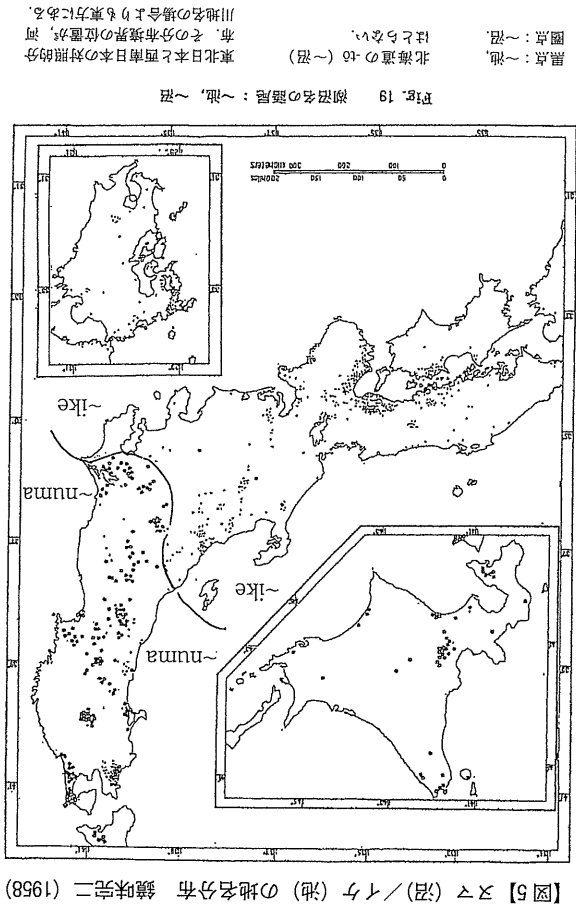


Fig. 13 河川名の語尾: ~沢

小点: 1個, 黒点: 10個, 著しい東北日本型分布, 九州に分布なし.



【図6】タニ(谷)の地名分布 鏡味完二 (1958) による

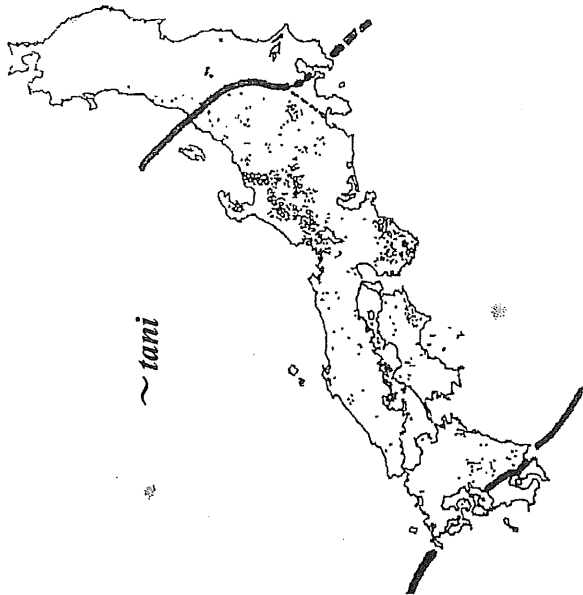


Figure 1.11: River names with the suffix *-tani* (Original map: Kagami 1958: 14 [From Suzuki 1978: 135]).

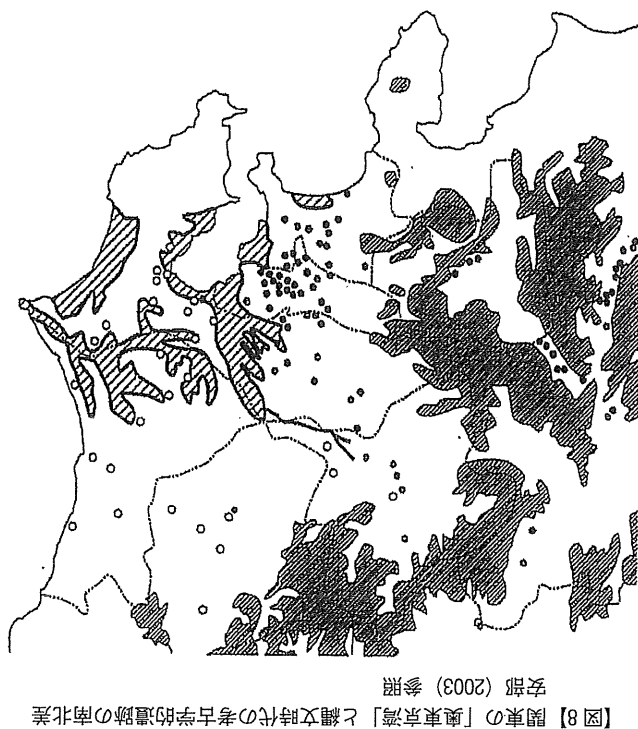
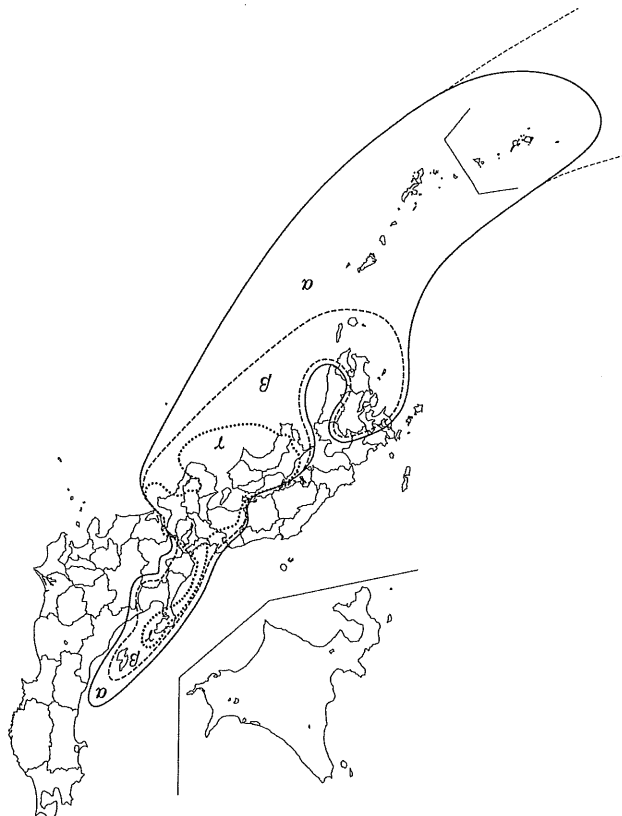
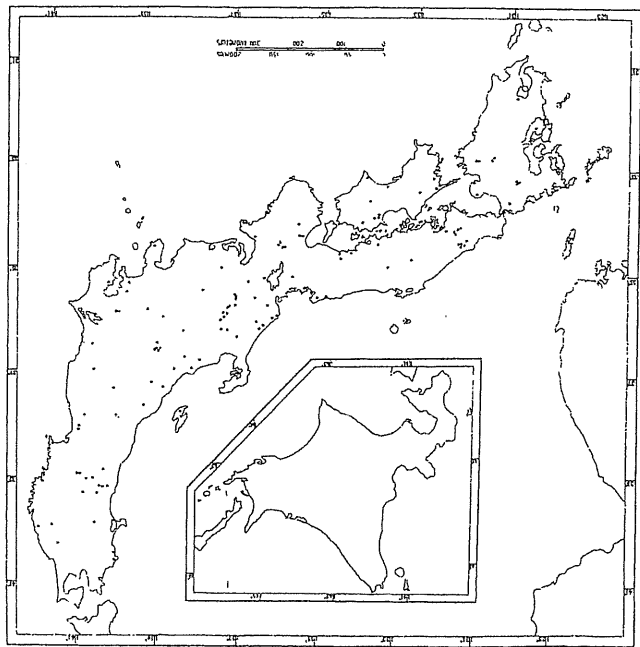


Figure 1.8: Distribution of sites with large numbers of flaked stone axes (●) and sites with clustered storage pits (○) in the Kanto region about 6,000 years ago (middle to late Jomon) (based on Imamura 1999: 91, Jomon no Jitsuzo o motomete, *Rekishi Bunka Kaibun*, Yoshikawa Kobunkan), and "ancient Oku-Tokyo Bay" (oblique line area) (From Abe 2003: 11).



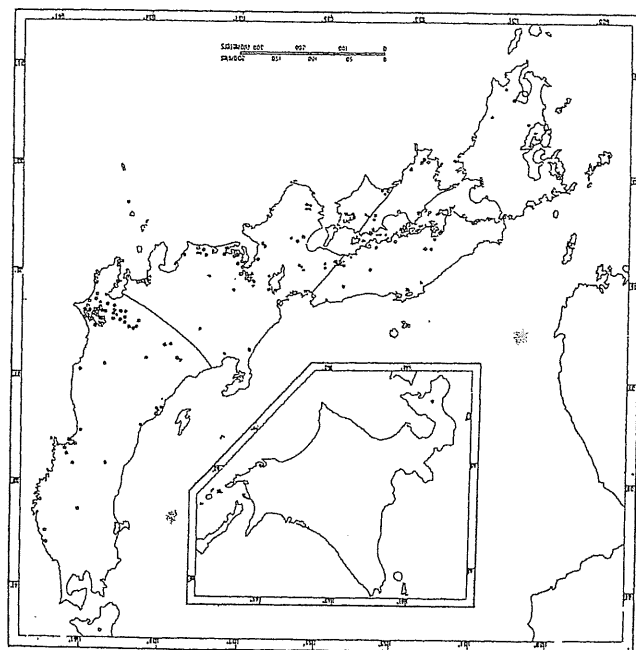
【図11】方言圏α-β-γの境界線(安部(2024.3))



Su.ngo (須郷・須川・菅生) は「比較的小さい谷」に与えられた名。
中国地方の中・東部に分布の空隙がある。

Fig. 253 Su.ngo

【図10-⑤】スコウ(須郷・須川・菅生)の地名分布
鏡味完二(1958) [Fig. 253 Su.ngo]

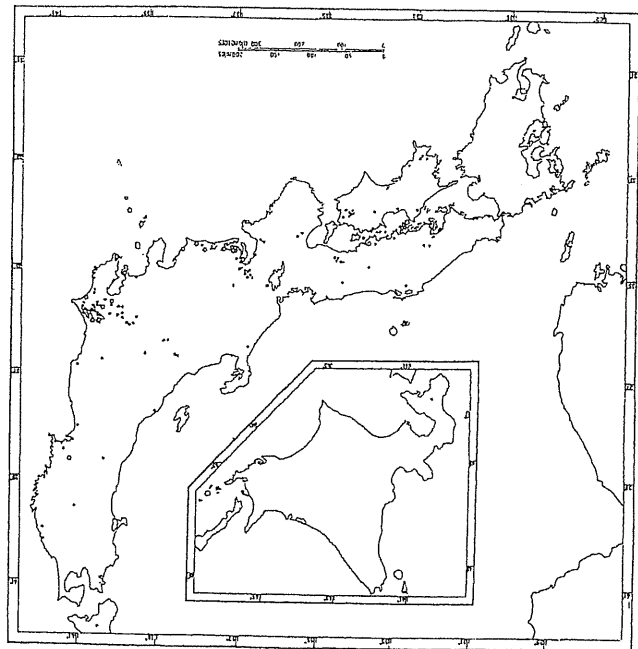


【図10-④】ソガ・スガ(曾我・須賀)の地名分布 鏡味完二(1958)

[Fig. 250 So.nga > Su.nga]

黒点: So.nga (曾我),
黒点: Su.nga (須賀),
名義は砂地,
o > u の音韻変化が、地域的
にも発達した順序を示している。

Fig. 250 So.nga > Su.nga



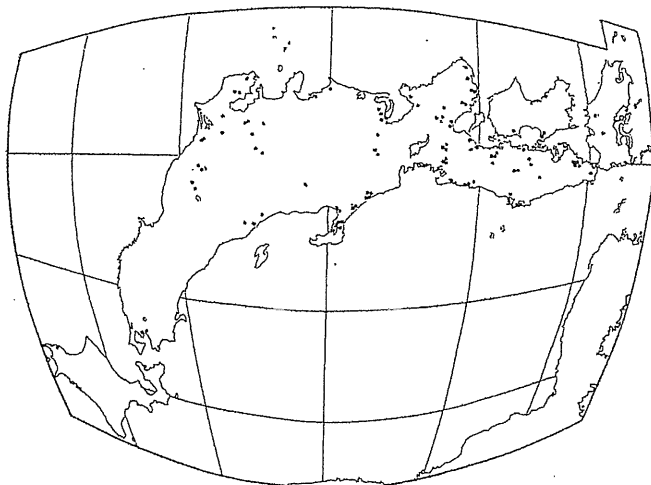
【図10-③】スカの地名分布 鏡味完二(1958) (州処?, suka < suga < "sungwa"?) [Fig. 316 Yokosuka, Suka]

Fig. 316 Yokosuka, Suka

黒点: 横須賀,
黒点: 須賀,
Suka は「洲」の
ある所」の意。
「横須賀」の分布は主として
東海地方に局限される。

視点：中部地方の中央、
眼高：600km、
1 方眼：300×300km²。
「水田」を Yada (矢田) といひ、「草茂つて
水のある所」や「沼地」を Ya という方言が
ある。これらが地名となったと考えられる。

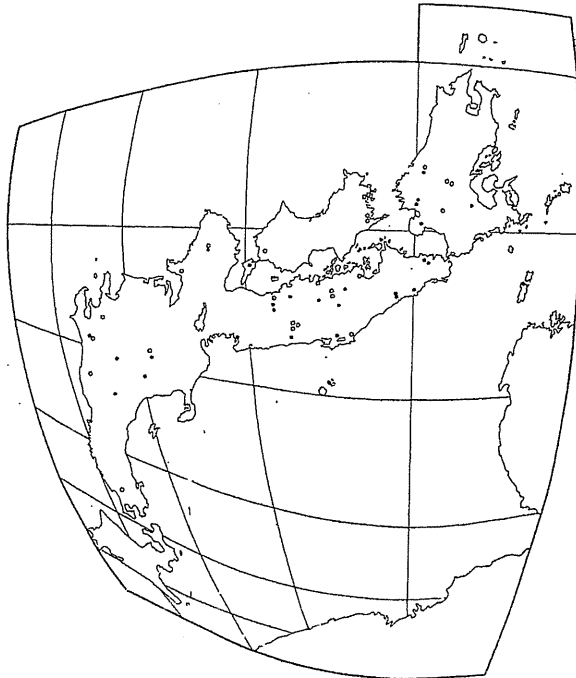
Fig. 302 Yada



【図 13-②】ヤタ (谷田) の地名分布 (鏡味完二 (1958))

視点：国東半島、眼高：600km、
1 方眼：300×300km²。
黒点：Yano (矢野)、
黒点：Yahara (矢原)、
「遷原」をい
地名と思はる。

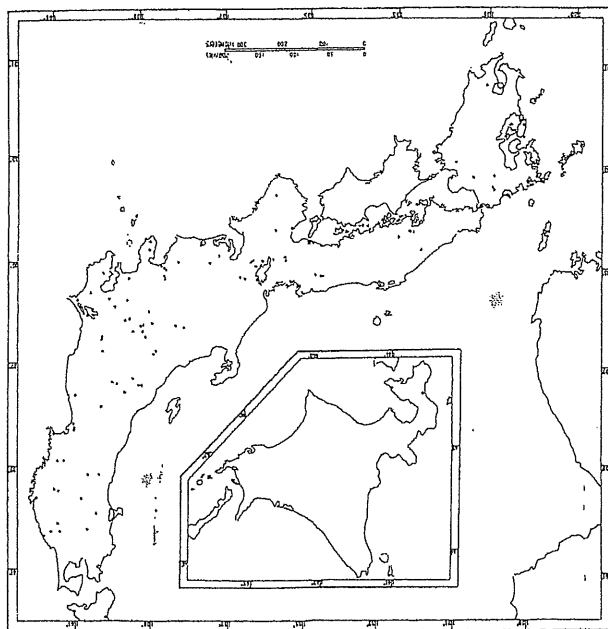
Fig. 311 Yano, Yahara



【図 13-①】ヤノ・ヤハラ (谷野・谷原) の地名分布
(鏡味完二 (1958))

Yanagi (八木) の名義不詳。
「山間の狭い小谷」の名が多い。

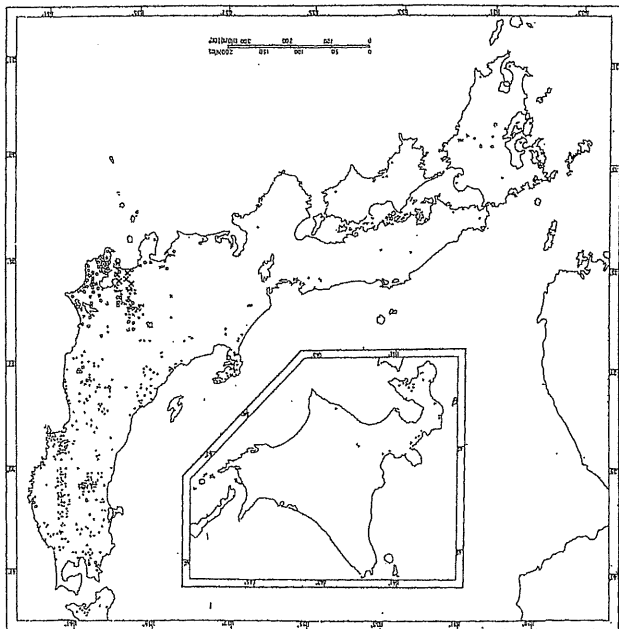
Fig. 310 Yanagi



【図 12-②】ヤギ (八木<谷岸か) の地名分布 (鏡味完二 (1958))

黒点：Yati (谷地)、
黒点：Yatu (谷津)、
小黒点：Yato (谷戸) [1 個]、
大黒点：Yato [10 個]。
「遷地」の地名。

Fig. 313 Yati・Yatu・Yato



【図 12-①】ヤチ・ヤツ・ヤト (谷地・谷津・谷戸) の地名分布
(鏡味完二 (1958))